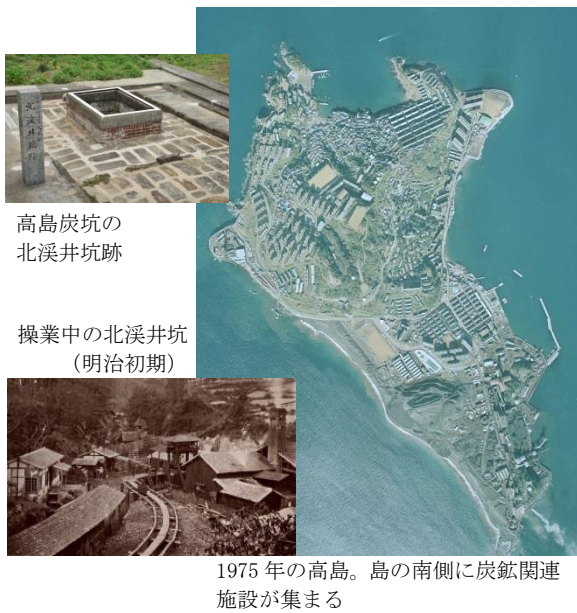


あおい通信 第139号

日本の世界遺産めぐり その十九 明治の産業遺産⑩ (文化遺産)

***高島炭鉱**(たかしまたんこう)
 長崎県長崎市高島(旧西彼杵郡高島町)にあった炭鉱。日本最古の大手資本による採鉱で栄えたが、一九八六年(昭和六一年)十一月二十七日をもって閉山された。端島炭鉱とともに、「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」(全23資産)の構成資産として世界遺産リストに登録されている。この歴史は、一九九五年(元禄八年)に平戸藩松浦郡江迎の五平太が石炭を発見したことが始まりとされ、その後幕末に佐賀藩とトーマス・グラバーが共同出資で採掘を始める。明治に入り佐賀藩から後藤象二郎が買って上げて操業を開始し、英

積・人口ともに全国最小を記録した。その後二〇〇五年(平成十七年)一月四日に平成の大合併により高島町が長崎市に合併され消滅。現在、高島では炭鉱施設を活かした町おこしを模索中である。



高島炭坑の北溪井坑跡

操業中の北溪井坑(明治初期)

1975年の高島。島の南側に炭鉱関連施設が集まる

***端島**(はしま)炭坑
 131号で「軍艦島」を紹介したが、その構成遺産関連の一部。端島は長崎港から南西約18kmの海上に浮かぶ、面積6.5haほどの小さな島で、江戸時代の終わりまでは、

漁民が漁業の傍ら「磯掘り」と称して、ごく小規模に露出炭を採炭する程度だった。本格的な石炭の採掘は一八七五年に旧深堀土族が天草の小山秀に請け負わせ始められた。その後、一八九〇年に隣の高島と同じく三菱の経営に移り、端島(軍艦島)は本格的な近代炭坑としての開発が進められていく。第二堅坑と第三堅坑が完成し、端島炭坑の出炭量は、一八九七年には高島炭坑を抜くまでに成長した。端島で採掘される石炭は良質であったため、主に八幡製鉄所に製鉄用原料炭として供給された。そしてこの頃には社船「夕顔丸」の就航、蒸留水機設置にもなう飲料水供給開始、尋常小学校の設立など居住環境が整備された。

世評・時評

今年も最終月師走である。光陰の如し、時と潮は人を待たず。現実の流れを認めざるを得ません。

人生の階段は確実に移りゆきます。今年の総括は前号で済みましたので、ここでは控えます。なぜ年末になると「第九」が流れるのか? ベートーベン作曲の「第九」と言えば、「喜びの歌」という名称でも知られる有名な交響曲だ。年末になるとよく耳にするが、なぜ年末になると「第九」なのだろうか。当通信、138より139号連続で松

原謙次氏の「バルトの楽園」で関係の内容紹介をさせて頂きました、是非ご参考に:
 1824年に完成したこの交響曲が日本で最初に演奏されたのは1918年のこと。徳島県にあった収容所に収容されていたドイツ人俘虜達によって演奏された。この時はまだ、年末に演奏するという風習は生まれていなかった「第九」と年末が結びつくようになったのは諸説あるようです。その①第二次世界大戦中十二月に行われた学徒出陣の壮行会に「第九」が

演奏された。後に鎮魂の意味をこめて年末に「第九」を演奏するようになった。
 ②第二次世界大戦後間もない頃、収入の少ないオペラストラ団員が、当時から人気のあった「第九」を年末に演奏し正月の餅代を稼いでいた。
 ③1937年に新交響楽団の指揮者に就任したヘルマン・ハイゼンが「ドイツでは年末には第九を演奏する習慣がある」と話し、年末に演奏会を開くようになった。などがあげられている。
 ヨッチャン

最近の高齢者による交通事故。一月二日、北海道北広島市のスーパーに九〇歳男性の車が突っ込み、二人軽傷。二月九日、香川県内高速道で八一歳の男性の軽乗用車が二時間間わたり一部逆走。三月二日、沼津市の立体駐車場で八四歳男性の乗用車が転落し、運転手が怪我。七月二日、福岡県大牟田市のスーパーに八四歳の男性の軽乗用車が突っ込

み、三人軽傷。八月三日、堺市の高速道につながる道路で八一歳の男性の軽乗用車が逆走し、トラックに接触。十一月十一日、横浜市港南区で集団登校中の小学生の列に八七歳の高齢者運転の軽トラックが突っ込み、一年生の男児が死亡した。栃木、下野では病院の敷地内を走っていた乗用車が正面玄關脇のバス停に突っ込み、ベンチに座っていた女性をはねた後、通路に乗り上げて鉄柱と壁にぶつかって止まった。女性は頭を強く打って間もなく死亡し、避けよう

◆編集委員会より
 「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。係員・飯島まで

葵友の会 広報コーナー
 11月の報告
 11日(金)カラオケ、「バンバン」にて、10名の参加。
 17日(木)18日(金)熱海かんぽの宿一泊旅行。参加者は12名でした。小田原鈴廣での昼食の参加。
 熱海城、十国峠、箱根プリンスなど盛り沢山、天気に恵まれた旅でした。(事務局長)



利用者さんの 綴りコーナー

高橋 勝正(月)

私は健康に気を使い、自立していけるようにと考えています。葵の他に敬老館に行くことや、筋力向上トレーニング、歌の会などです。



星野 志奈子(月)

葵にくる前は不安もありましたが、今では一週間に一度が待ち遠しいほどです。皆さん、いい方ばかりで笑顔が絶えません。お話できるのがうれしいです。



金野 健(木)

初めてデイサービスというところに来て、まだ戸惑っています。趣味は美術です。「リトグラフ」を作ります。説明するのがちょっと難しいので、今度作品を持ってきますので、見てください。



《能》

額田美保

室町時代の作者が作った能に「求塚(もとづか)」があります。摂津の国を舞台にしたこの能は、菟名日処女(うなひおとめ)と云う美しい乙女をめぐる、二人の男の妻争いの物語です。

おかいこぐるみで育てられた深層の乙女、噂の美少女を娶らんものと垣をなして集う求婚者達。中でも格別に熱心な千沼壮士と菟原莊子、この二人は乙女の為なら火の中水の中と、武器を取っての争いも辞さぬ勢いです。乙女はそれを苦にして

悩みぬいた末、母親に覚悟のほどを述べます。「とるに足らぬ私ゆえに、立派な殿方が争うのを見ていますと、生きていても結ばれそうに有りません。黄泉の国でお待ちしましょう。」

千沼壮士はその死を夢に見てすぐ後を追います。おくれをとった菟原莊子は悔しさの余り、天を仰いで地団太を踏み、黄泉の国で決着をつけようと言うのか」と太刀を身に帯びて二人の後を追うのです。こうして三人は次々とこの世を去り、後には親族たちの造った三つの墓が残りました。乙女の

の部落も、景気の良い丘の上に新しい村を造る事が出来ました。主な農作物は大豆で、秋になると収穫品を日本に送り、日本の食糧増産に寄与したと思います。

私は一九二九年(Ｓ四年)長野県諏訪の農家の次男として生まれました。姉、兄、妹、第二人の六人兄弟でした。父は長男で、下に妹が二人。

一九三七年から当時の日中戦争で北支に出征しましたが、国策として推進された満州開拓運動に共鳴し、村が満州に分村するとの村議決定に従い、一九四二年(Ｓ十六年)五月に、祖父、祖母、長兄三人を残して渡満しました。

現地での生活は村人との共同生活で、苦難の連続でしたが、二年後には各部落共、個人経営に移行できる迄になり、私達

墓を真ん中に、壮氏の墓を両側に。

これは、遠い昔の万葉集のなかに残されている伝説のお話ですが、万葉の歌人たちはそうした伝説を歌に詠み、後世に遺して呉れて居るのです。そしてその墓に行くたびに、涙を禁じ得ないと歌います。

葦屋の菟原娘子の奥城を行き来と見れば哭のみし泣かゆ(あしやの うなひおとめのおくつきを いきくとみればねのみしなかなゆ)「歌意」葦屋の菟原娘子の墓を行ったり来たりするたびに見るとただ泣けてくるばかりだ。

今でも忘れる事はありません。約900人の内、300人ほどは帰国できませんでした。幸い我が家族は父を除いて母、姉、妹、第二人共無事、信州の実家に帰る事が出来ました。

私は一九五〇年一月に上京し製薬会社に入り三七年間と、その関連の研究所に一四年、計五十二年間働いて七十一才で退職しました。

八十一才になり現在のデイサービス葵のご厄介になり始めて五年以上になります。ここでは社長はじめ、スタッフの皆様との終始、変わらぬ親切な対応のおかげで、楽しく過ごさせてもらっています。また大勢の人達と接することで、人間として

なんでも落語屋 六

絹田治夫

今回は、噺家が使う高座扇について。

『白無地で骨は五本。頑丈一点張りの実用品』噺家の小道具といえ、扇子と手拭いです。噺家が使う扇子は高座扇とも呼ばれ、いろいろ仕草を見せることができる。ご存知のように箸に見立てて蕎麦や、うどんを食べたり、煙管に見立てて一服つけたりする。刀や槍、舟を漕ぐ櫓にも

なるし、扇子を開けば手紙にもなる。新作落語では電話の受話器や、自動車のハンドルなんて使い方もする。人によっては武士の刀と同じで、噺家の鏡だ、なんて言ったりもする。

「そんなことないですよ。ときどき、忘れたりすんだから」とベテランの真打が言っていました。でも、ご飯を食べるときも、箸と同じで、噺家にとってはなくてはならないものなんです。だから、汚れたり壊れたりしてもゴミ箱に捨てたりはしない。毎年8月、落語中興の祖・三遊亭園朝を偲ぶ「園朝まつり」では、一年間の感謝を込めて「お焚き上げ」を行う。扇子を火にくべて供養します。夏場になると、以前はスーツの内ポケットから扇子を出して、パタパタとあおぐ光景も日常的でした。

あおい俳壇・秋壇

青空に 秩父連山 遠く見ゆ
秋の夜に 三味の青色に いやされて

相田美代子



の生き方を改めて見直す日々です。この様な機会を作って下さった皆様方には心から感謝しています。これからもよろしくお願ひ申し上げます。終わりに私の駄句を一句「寒月や 父の撃たれし 大地哭く」

雑学館

一休さんとはんち小僧ではなかった。

とんちといえは一休さん。大人も唸るそのとんちに、夢中になった人も多いだろう。一休さんは現在の人物、一休宗純であることは知られた話だが、実際の一休さんとはちんち小僧ではなかった。

最近は何処でも冷房が完備されているので、扇子など使う男性が少なくなりました。つづく

と聞けば驚く人も多いのではないだろうか。1394年に生まれた一休宗純は、臨済宗大徳寺の僧。私たちが見知っている「一休さん」は、彼の子供の頃がモデルとなっている。こめた意味で風変わりな行動を起こしていたと見られていたのだ。骸骨を持つて挨拶に回るのは人間死ねば、みな同じ」という意味があつたようだ。と酒や肉をたしなみ、女性と交わるといった、戒律を守らない破壊僧になつてしまった。

わざと小汚い格好をしたり正月には骸骨を抱えて挨拶に回る、など数多くの奇行が見られたという。だが、一休さんがど

